

怪文書



六角弘

光文社新書

009

六角弘 (ろっかくひろし)

1936年生まれ。夕刊紙記者を経て、「週刊文春」記者に。企業犯罪などを中心に取材活動を展開する。'95年10月から、収集した怪文書を公開する「六角文庫」を開設。'98年4月から、ジャーナリスト志望者向けの寺子屋「六角マスコミ塾」を主宰する。編著書に『怪文書の研究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』（晩聲社）、『ドキュメント企業犯罪』（ベストブック）、『絵葉書が語る 明治・大正・昭和 上・下』（ビッグ社）などがある。

かいぶんしょ 怪文書

2001年10月25日初版1刷発行

著 者——六角弘

発行者——松下厚

装 幀——アラン・チャン

印刷所——堀内印刷

製本所——榎本製本

発行所——株式会社 光文社

東京都文京区音羽1 振替 00160-3-115347

電 話——編集部 03(5395)8170 販売部 03(5395)8112

業務部 03(5395)8289

メー ル——sinsyo@kobunsha.com

☐本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

落丁本・乱丁本は業務部へご連絡くだされば、お取替いたします。

©Hiroshi Rokkaku 2001 Printed in Japan ISBN 4-334-03109-9

怪文書

六角弘



光文社新書

目次

1章 怪文書とは何か

怪文書との出会い／怪文書の定義／「東電OL殺人事件」怪文書の「魅力」／発行人の執念深さに慄然／怪文書史上最大の大作／「鳩山家ニセ結婚式招待状」／現在は第三次ブーム／えげつない宗教界の怪文書

2章

堕ちた首領——— すごい怪文書———

救助を求めるシグナル／閨閥からすごい入りした水島／閨社
会とデパートとのつながり／水島の「城取り物語」／怪文書
もやがて断末魔の叫びへ

3章

闇に消えた三〇〇〇億円——— イトマン怪文書———

大蔵省銀行局長宛／「戦後最大の経済事件」といわれる所以
／イトマンと住友の腐れ縁／主役・伊藤寿永光との出会い／

4章 政界と怪文書

怪文書の犯人捜し／手詰まりを打破する超一級資料／スクープという名の幻／闇紳士達の競演／イトマン専務の謎の自殺／“天皇”と言われた男の最期／河村、大阪府知事選に出馬

プライバシー裁判へとつながった怪文書／逮捕を免れたノベル平和賞受賞者／切手代だけで一〇〇万円！／“三角大福”入り乱れての怪文書合戦

5章 政治家とヤクザをつなぐタニマチ

——東京佐川怪文書——

不発に終わった大疑獄事件／すべては平和相銀から始まる／東京佐川と稲川会との接点／フィクサーの世代交代／東急電鉄株買い占め事件／佐川マネーに蝟集した有名人／隣人のクラブママの次男がタックル／佐川と渡辺、タニマチ同士の確執／怪文書の嵐が吹き荒れた後には……

6章 経団連会長の夢破れ —— 「防衛庁巨額水増し請求」怪文書 —— 125

血税をすする防衛官僚／政財界、マスコミを巻き込んだの獵官活動

7章 バブルの波に乗り遅れ —— 拓銀怪文書 —— 133

金融不安の先駆け／事件は場所を選んでくれない／“本土”への遅すぎた進軍／フグを手始めに本丸に迫ろうとした当局／取材拒否、取材拒否、取材拒否……／札幌は怪文書の山、山、山／“ピンクの化身”現る／帰り際分厚い封筒を渡されて

8章 元大蔵キャリアの錬金術 —— ヤクルト怪文書 —— 165

怪文書のデパート

9章 怪文書とブラックジャーナリズム —— 171

改正商法で大打撃を受けたブラックジャーナリスト／百花繚乱の黎明期／暴走する夕刊紙／早すぎた「田中角栄金脈研究」

10章 切れぬ腐れ縁 —— クボタ怪文書 ——

肥大化による組織の分断／社内のライバルを怪文書で告発

187

11章 一兆円を操った「IQ84」 —— 東洋信金事件怪文書 ——

金融犯罪史上けた外れの額／二流料亭の女将がなぜ……／父親の死、母親の男／「銀行の中の銀行」、オバサンに手玉に取られる／縫は仕手筋か？／「縫」ブラックマネーのロンダリング機関「説／「IQ84」戦術

197

12章 なぜ社員ばかりが厚遇されるのか —— 第一火災怪文書 ——

大蔵省出身の天下り会長／使い込み、不倫、インサイダー

215

怪文書をきっかけに急遽ロンドンへ／守衛の話が二転三転／
スコットランドヤードのプレスルーム／自殺の原因？ 会長
に直撃／相次ぐエリート社員の挫折／記者の怨念が陽の目を見
ることも

あとがき

参考文献

1章

怪文書とは何か

怪文書との出会い

いわゆる「怪文書」と私との出会いは、今から三十年以上も前の、一九六六年はじめてのことだった。

週刊誌がすつぽり入るほどの大きさの茶封筒に『防衛庁の黒い墓標』と題する薄いパンフレット、そこには、「こんなものが手に入りました。ご参考までに」の添え書きが付けられている。後に、新聞、雑誌等で大きく取り上げられ、国会でも追及されて何人もの逮捕者まで出た、いわゆる「防衛庁怪文書事件」の発端となった原本がそれであった。

B5判一五ページで、タイプ打ち。当時でも一枚四〇〜五〇円は取られる上質紙に、孔版印刷された立派なつくりである。内容は政府の第三次防衛計画に関わるもので、防衛庁の海原治官房長に関するスキャンダルが満載されていた。

文書の後に「ATOM」と署名があったが、もちろん、思いつくままに付けたであろう、適当な名前に違いない。発行所も発信地もない、まぎれもない怪文書であった。

この『防衛庁の黒い墓標』を私に送ってくれたのは、ある週刊誌のO記者である。ご丁寧なことに『防衛庁の黒い墓標』のなかには、万年筆の黒い太い文字で解説が付いており、海原の女はどこに行けば会えるとか、癒着企業はここそこで担当者は誰と誰、といったこと

が書かれていた。

不思議な文章だなあ、というのが私の第一印象で、内容が真実なのかどうかの判断はもちろん付かなかった。ただ、労作であることだけは疑いようがない。そしてなによりも、自分宛に寄せられた情報で、まだ表面に出ていない新鮮なネタであるということに興奮したことはよく憶えている。

そのころ、『観光新聞』という夕刊紙があった。「東京タワーは傾いている」「防衛庁に巣食うスパイ」「詐欺師列伝」など、いまの週刊誌が取り上げているようなホットでセンセーショナルな話題を好んで扱っていた。

当時『観光新聞』は発行部数数十万部を誇っていたが、私はその社会部の駆け出し記者。怪文書を送ってくれた〇記者とは、戦後の混乱期「銀座警察」の異名をとって、街の人から恐れられていた、暴力団東声会の町井久之会長主催のパーティーで出会って意気投合、それ以来のつき合いだった。

ところで、この防衛庁を引っかき回した怪文書の作者が、後に〇記者本人だと分かり仰天したのだが、当初は、いったい誰が何の目的で出したのか見当もつかず、結局筆者不明のまま、関係者や周辺取材で紙面を埋めた（後から判明したところでは、〇記者らは原稿料稼ぎ

のために請け負っていたらしい)。しかし、記事が出ると同時に、新聞、週刊誌が一斉に書き立て、大問題に発展していった。高い製作費をかけた怪文書の製造元は、大きな反響が出たことで目的を十分に果たしたことだろう。

私が怪文書の威力に驚嘆し、やがて雑誌記者という仕事を通じて怪文書と関わるようになったのは、まさにこの時からである。

怪文書の定義

怪文書とはいったい何か。いささか古いたとえて恐縮だが、「多羅尾伴内」風に口上を述べる とすれば、あるときは悪を告発する正義の味方、そしてあるときは個人の恨み晴らしの道具、またあるときは社会騒乱を起こして喜ぶ愉快犯……ということにでもなるうか。

どこから飛んでくるのか、まったく予測ができないし、犯人の特定も難しい。まさに闇討ち、通り魔に遭うようなものである。しかし、たとえ嘘の内容でも、一度人の噂話に登場すれば、燎原の火の如く、またたくうちに広がってしまうのが怪文書だ。

このように扱われ方次第で意外な効果を生み、大ケガをすることもあるので、「紙爆弾」「紙つぶて」「ペンのお仕置き」「活字のゴキブリ」などとも呼ばれている。

ところで怪文書とはいったいどのようなように定義づけされるのか。広辞苑を繙いてみると、「いかがわしい文書。無責任で中傷的・暴露的な出所不明の文書または手紙」と記述されている。

これをもとに、私流の解釈を加えて定義付けすると、

1 差出人が不明であること

2 ターゲットがあること

3 不特定多数にバラまかれていること

の三条件を満たしたものであることになる。

「東電OL殺人事件」怪文書の「魅力」

たとえば、これらの条件を満たしたものであっても、怪文書の中には、単なる他人の生活のノゾキ見やスキヤンダル、尾ひれをつけたゴシップや捏造されたデマもある。ましてや今は、インターネットによって、誰もがかんたんに不特定多数に向けて情報を発信できるようになった。タレントのアラ探しや、企業や店の悪口、クレームの掲示板への書き込みなども怪文書と呼べなくもない。

しかし、これらは言ってみれば、その場の思いつきでタレ流されたような類たぐいの、刹那的なもの。本書で扱う怪文書はこの手のものは含めない。あくまで真実に基づいてターゲットを定め、そのターゲットに社会的な不利益をもたらすなどの目的を持ち、かつ長期にわたる戦略的観点から流されたもの——そんな怪文書の上に絞ってみたい。ターゲットとは、特定の個人、団体、企業で、目的とは、それらのイメージダウン、社会的信用の失墜、抹殺である。とはいうものの、よく出来た怪文書というのは、たいていウソとデマと真実とが巧みに織り交ぜられており、一読したくらいでは見破ることができないよう、文章もレトリックもうまいぐあいに構築されている。

よく出来ているといえば、一九九七年の三月、東京・渋谷のラブホテル街で起きた「東電OL殺人事件」に絡んで、【日本の企業、司法、マスコミ、政府に抗議警告をします】と題する以下のような内容の怪文書が出回った。

【Y子さん（被害者の名前。文書内では実名）は東電やO氏（文書内では実名）の公私にわたる、ありとあらゆる秘密を知っていたので、Oはどうしてもその存在を抹殺しなければならぬという状況にありました。特に近年、Yさんが精神に異常をきたしつつあり、

1章 怪文書とは何か

日本の企業、司法、マスコミ、政府に抗議警告をします

1997年3月7日の深夜から8日未明にかけて、東京都 渋谷区 円山町にあるアパート「喜寿荘」の101号室に於いて、東京電力に勤務する渡辺泰子さん(当時39歳)が、[]という男に殺害されました。泰子さんは東電や[]の公私にわたる、ありとあらゆる秘密を知っていたので、[]はどうしてもその存在を抹消しなければならないという状況にありました。特に近年、泰子さんが精神に異常をきたしつつあり、泰子さんの口から東電や[]などの悪事が、世間に露呈される恐れが十分にありました。泰子さんがかような精神状態に陥ったのは、東電のシークレットワークに良心の呵責を覚え、さらに[]の命令で東電の役員連中とのセックスを強要され、泰子さんが恋人だと思っていた[]に裏切られたからです。この事件は犯行現場の近所に住んでいて、覚醒剤販売などの密売をしていた、イラン人青年によって目撃されましたが、このイラン人青年は事件発覚後、オーバーステイで渋谷警察に逮捕され、急速イランに強制送還されてしまいました。そしてこのイラン人青年は帰国後、テヘランで交通事故により「殺害」されました。警察は当初はまともな捜査をしましたが、[]グループ、東電、政治家の圧力と暗示を受けて、以前に泰子さんと関係のあったネパール人のゴビンダ・ブラサド・マイナリ氏をまずオーバーステイで逮捕し、その後、強姦殺人罪で逮捕するという典型的な別件逮捕を敢行しました。ゴビンダ氏は現在東京拘留所に在監中で、まことに奇妙で滑稽な裁判の被告人になっています。裁判に於ける警察検察の横暴は、嘘に嘘を重ねた為、メチャクチャなものになりました。また検察官は、「被告人に有利な証拠」も提出する義務がありますが全く無視しました。警察はもちろんの事ですが検事さえも東電や[]グループから利益を受けている疑いがありますし、もしかしたら担当の裁判官さえもその疑いが無いとは言えません。今の日本には「司法権」の独立は無く、司法はパワーのある行政官や、仲間である官僚に追従し、自らの利益を追求しています。以前の日本には罪刑法定主義と司法権の独立を、身を挺して守った「児島惟謙」という立派な司法官もいましたが、今はそのような気骨のある人物はいません。日本の元最高裁判事の横田氏が、その著書のなかで「法律は蜘蛛の巣と同じで蠅や蚊は捕まってしまうが、カブト虫はつき敬ってしまう」と述べていますが、今まさにこの暴挙が日本で起まっています。

[]は現在、[]グループに属する「[]製菓」の副社長です。[]は故[]元総理大臣の三男として生まれたことになっていますが、実は現在渋谷の円山町で貸しビル業を営んでいる元SKDダンサーの、故[]元首相の「愛人」との間に生まれた不義の子です。このことは[]の重要な秘密でしたが泰子さんに知られてしまいました。円山町を徘徊していた泰子さんが偶然にもその愛人と出会い、顔があまりにも[]に似ていたため気付いてしまったのです。泰子さんと[]は以前、共に東電の同じセクションで勤務していましたし、卒業した大学も同じ慶應大学でした。当時二人は[]という上司の指示でシークレットワークに就いており、「[]」という工事会社を経由して、政治家連に非法の金銭をばらまいたり、利益の誘導をしたりしていました。泰子さんと[]には共に強い「共犯」という意識がありました。[]には現在も過去も、政治家に金をばらまかなければならない事情が山ほどありました。この「[]の悪事」については、後日詳

「東電OL殺人事件」に関する怪文書(伏せ字は編集部/以下同)